

# 品質活動に付随・隣接する環境活動に関する研究

2009.11.28 国府保周

品質活動と環境活動とは、対峙するものではなく、協力し合うもの、補完し合うものである。そこで、品質活動に関連性の高い環境活動にどのようなものがあるかを整理してみた。

## 1. 環境活動の強制度／任意度に基づく区分

環境活動にもいろいろある。強制度と任意度という観点から、それらを下記の4種に分類する。

- a) 排水・排ガス処理のように、公害等の法規制を順守するために必ず行う必要のあるもの
- b) 不良品の発生低減など、普段の仕事を工夫することで環境負荷を低減できるもの
- c) 紙・ゴミ・電気に限らないが、従業員・生活者として普通に行う環境活動
- d) 地域の河川清掃ボランティアなど、非日常的な環境活動

## 2. 環境活動の基本となる一般事項

前述のように、環境活動は、法規制（と顧客や地元など利害関係者との約束）を除いて、基本的に任意活動である。とはいえ、何に取り組むかの大きな方向性は、考えていく必要があろう。せつかく環境活動を行うからには、本業と密接に絡むもので、しかも本当に効果が上がるものを採り上げたい。その際のヒントとなる事項を、つぎに、いくつか紹介する。

- 不具合の発生が減れば、無駄な材料やエネルギーを使わなくなる
- 業務効率が高くなれば、エネルギー使用量は減少する
- エネルギー効率のよい装置を使えば、消費エネルギーは少なくなる
- 安価な材料は、環境影響が比較的小さいものである率が高い
- 業務の進め方に無理や無駄がなくなれば、業務は順調になり、環境にも寄与できる
- 環境に寄与できる方向で捉えると、多くの場合、経費は低減する
- ビジネスに直結するテーマ、納得できるテーマは、意欲的に取り組める（続けられる）
- 環境上の大きな改善は、新たなことを始めるときか、大きく変革するときが実施しやすい
- 品質などを検討していると、いつの間にか、環境のことも視野に入れて取り組んでいる
- 当事者が意欲を出せば、自分なりにさまざまな工夫を重ねる

## 3. いつの間にか自然に行っている環境活動

組織運営には、種々の活動がある。これまでも行っている活動の中にも、いつの間にか自然に環境改善活動になっているものがある。下記のような観点で捉えていくと、環境のことに結びついてくる。

- 業務のムダとり（日常的な取組み）→無駄が減れば環境に優しい
- 残業時間の低減（業務効率に関連）→少なくとも残業時の照明や空調の電力が不要
- 工事期間の短縮（建設業）→資材・エネルギーなど、あらゆる面で環境影響は低下
- 原価低減（設計時・生産方法の設定時など）→原材料費・加工費と環境負荷の関連を考慮
- 経費節減（組織として常に考えるテーマ）→環境活動が充実すれば通常は経費節減になる
- 5S活動（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）→職場環境維持の基本的な考え方

#### 4. 積極的に行う環境活動

環境活動というと、なんとなく「日頃からの行動と工夫の積み重ね」というイメージがある。たしかに「継続は力なり」という面での的を射ているのは事実である。しかし大きな変化は、何かきっかけがないと、なかなか進まない。現実には、新たなことを始めるとき（新規設備導入など）や、大きく変革するとき（新素材を用いた製品など）、つまり下記のような場面であると、環境に関する大きな取組みテーマを組みやすくなる。

- 商品設計（商品コンセプト、商品技術、省エネ仕様、構成・構造・使用材料などの変革）
- 設備導入・更新（消費エネルギー、動線、保全方法、耐久性などの変革）
- 製造方法の決定（自動化、治具、業務効率、工程管理確実化、不良率低減などの変革）
- 協力会社への環境技術提供（環境管理手法、環境配慮工程、不良率低減などの変革）
- 顧客への環境貢献（省エネ製品、業務効率向上型、環境技術提供などの変革）
- 販売戦略の策定（顧客を通じた環境貢献、顧客の環境施策への参画などの変革）

このように整理してみると、自然に行う環境活動の多くは、品質活動に付随するか、隣接していることが分かる。品質活動の工夫の多くは、環境活動につながると考えることができるのではないか。

以上